



TITLE:

# 実践型地域研究ニューズレター：ざ いちのち No.8

AUTHOR(S):

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア  
研究所：在地と都市がつくる循環型社会再生のた  
めの実践型地域研究

---

CITATION:

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア研究所：在地と都市がつくる循環型社会  
再生のための実践型地域研究. 実践型地域研究ニューズレター：ざいちのち No.8. 実践型  
地域研究ニューズレター：ざいちのち 2009

ISSUE DATE:

2009-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147131>

RIGHT:

まちやむら、そこに住む人びと（＝ざいち）の、  
知恵や生き方（＝ち）から学び、実践する活動です。

# ざいちのち

No. 8 2009. 06.

京都大学  
生存基盤科学研究ユニット  
東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

守山市 木浜

## 朽木フィールドステーション

### 余呉町で焼畑の山開き

滋賀県立大学／朽木 FS 黒田末寿

#### 雑木林での焼畑

朽木 FS と「火野山ひろば」は、機械化や過疎で利用が放棄された土地、忘れられつつある農林業技術を新しい技術と結合して復活させることを目指しています。その柱の一つが焼畑で、前（本ニュースレター第3号、第7号）にも報告したように、私たちは摺墨（するすみ）山菜加工組合長の永井邦太郎さんと2年前から、余呉町中河内（なかのかわち）の雪崩場で焼畑を行っています。この現場は、昔、焼畑をしていた場所で、土もまずまず肥えている焼畑適地なのですが、雪崩でほとんど木が育たないところなので、3年で焼畑を放棄した後の利用法がウド・ワラビ・山芋など山菜の採集ぐらいに制限されます。そこで、伐採雑木の利用、放棄後に利用できる作物の植栽、自然植生回復の観察などが行える、雑木林での焼畑の復活を永井さんに相談していたところ、今年から、余呉町の菅並（すがなみ）で区有林の一部を使わせていただくことになりました。

4月12日に、菅並生産森林組合（横山拓三組合長）と1反（10アール）の貸借契約を交わし、菅並・摺墨・中河内の皆さんと焼畑を共同で行うことが正式に決まりました。5月5日には、地元との懇親の意味も兼ねて摺墨の田植えに出かけ、前日は余呉上丹生のお祭り（茶碗まつり）だったこともあって、大歓待でした。

#### 山開き

5月12日に第一回目の伐採、焼畑の山開きです。現場は40年ほど前まで薪炭林だったということで、胸高直径20～30センチメートルのケヤキ、エノキ、コナラなどが生えた南西向き急斜面です。木材として利用するには、冬に伐採しなければならないのですが、今回それはできません。この日の伐採木は、滋賀県でヨノミノキと呼ばれるエノキで、永井さん

が木之本町の施設にヒラタケの原木として持っていく予定になっています。伐採は午前から始まり、事前に火野山ひろばメンバーの野間さんが植生調査を、永井さん、今北さん、菅並の横山さん、杉山さんが伐採を、増田さんが運び出しの力仕事を行い、夕方からはこぬか雨の中での作業となりました（写真1）。用事で出遅れた黒田が現場に着いたときは、中・小木が10本近く倒され、ヨノミノキは輪切りになり、ケヤキを軽トラックで斜面下に引きずり下ろしているところでした。4時頃、作業を終え、山の神様にお供えをして永井さんが祝詞をあげ（写真2）、山仕事の無事と焼畑の豊穰を祈って、直会<sup>[1]</sup>をしました。

#### 作業日程

今年の作業予定は、6月中頃から7月にかけて、今年火入れする5畝分の伐採をします。もうかなり伐っているわけですが、防火帯部分の伐採と、日当たりをよくするために南東側の木の枝払いも行う必要があります。小枝は火入れ用に残し、太い部分は炭焼きします。7、8月に火入れ準備と山小屋作り、火入れと種蒔きは、お盆前後になりそうです。余呉の在来品種である山かぶらを主体に、大根、人参を始めさまざまな作物を作って利用を考えることを課題にしています。山小屋は、火入れによる野山の再生と利用、雪の利用の拠点にしたいと思っています。

#### 脚注

[1] 直会（なおらい）：神事のあとお供え御神酒をいただく宴会



写真1: 伐採地はかなりの急斜面。対岸に見えるのが菅並の集落(写真撮影:野間直彦)。



写真2: 作業終了後、伐採地に向かって祝詞をあげる永井さん(写真撮影:野間直彦)。

## 保津川筏聞き取りノート② -筏の構造①-

亀岡FS研究員 河原林洋

今回は筏の部材と名称そしてその役割を見ていきたい。筏はただ材木を並べて組めばいいというわけではない。特に保津峡の急流を流す場合、筏の幅や長さはその時の水量などの諸条件と筏士の経験で多少変化したようだ。ここでは基本的な筏の形を見ていくことにする。

保津峡における筏は上流部の筏とは違い、川幅の狭小さもあり、幅約4m、長さ約50mほどであった。筏全体を「枚」と呼び、上流から筏が来た場合、「今日は3枚来た」などと勘定していたそうだ。1枚の筏を細分化すると、幅約3寸（約9cm）長さ3間（約4m）の材木を横に10～12本並べ、「カン」、「藤蔓」または「ネソ」、「コウガイ」で括り組んだ。（筏の基本構造①参照）この組んだものを「連」と呼んだ。さらに先頭の連から「ハナ」「ワキ」「ソウ」、最後尾を「猿尾」と呼んだ。それが12～15連、連なって1枚の筏となるのである。（筏の基本構造②参照）「カン」とは各材木を横につなぐときに使う備品でU字型をした金具である。この金具を材木の先と後に一本ずつ打ちつけ、木とU字型のカン金具の間にできた穴にコウガイと藤蔓を通し、各材木をくくりつけるのである。

### 【筏の基本構造①】

（前から見た図）



**カン** 直径10mm×長さ23cmの鋼鉄の棒をU字型に曲げ、先をとがらせる。



**コウガイ** 主にカシの木が使われた。筏の幅に合わせて切り揃える。



**藤蔓** 1尋半～2尋に切られた藤の蔓。両端のカンに巻きつけて捻じってくくられる。  
※尋とは、両手を左右に伸ばした時の、指先から指先までの長さ。1尋は約1.8m。

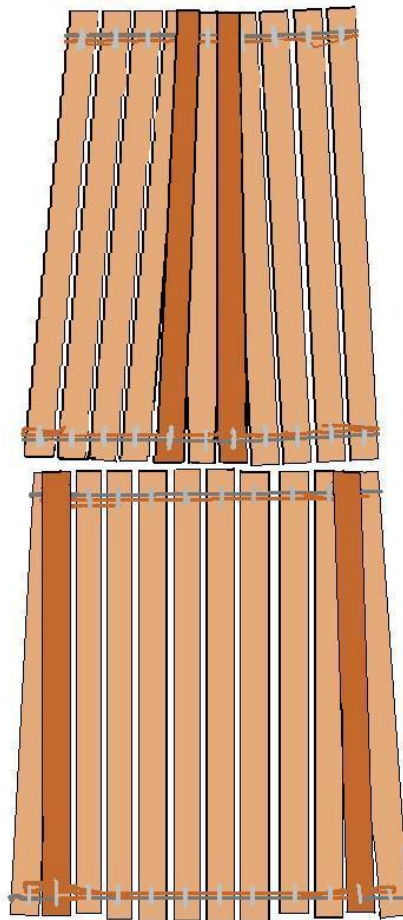


**材木** 主にスギ、ヒノキ、マツが選ばれた。



### 【筏の基本構造②】

（上から見た図）



**ハナ = 1連目**

1連目は、真ん中の材木の両脇に材木を2本置き、前は重ね、後はかまして後尾の幅を広げる。  
これは後でカジボウ（舵）を設置するとき利用する。  
（わかりやすいようにわざと色を変えています。）

**ワキ = 2連目**

2連目からは両端の1本内側に1連目と同じ要領で材木をかまし、後尾を広げる。

上図のように、前を狭く、後ろを広く扇形にすることで、前は水の抵抗をやわらげ、後は水の流れを抱き、推進力を確保する。

※他の藤蔓で括りつける部分は図をわかりやすくするため、割愛しています。

「コウガイ」は固く粘りのある木が最適で、主に樫の木が選ばれた。太さ親指くらいで長さは筏の幅ほどに切り、カンで押え据え付ける。コウガイには主に材木が上下して外れないように固定する役目があるようだ。

「ネソ」や「藤蔓」は材木が広がらないようにするロープ的な役目を担っている。材木とカンの間にできた穴に通し、両側の材木において、藤蔓をカンに巻きつくように捻じって括り固定する。こうすることで材木が水の抵抗を受けても横に広がらないのである。

このように材木、カン、藤蔓、コウガイを使って、連をこしらえ、縦につなぐことで1枚の筏が完成するのである。



### 野洲川の新河川建設：放水路

生存基盤科学研究ユニット 藤井美穂

滋賀県の最大の河川である野洲川(延長約 65km、流域面積 387km<sup>2</sup>)は、鈴鹿山脈を源流として、杣川(そまがわ)と合流し、かつて、守山市の川田町の地点(河口から約 5km)で南北の2つの川に分かれて、琵琶湖に注いでいた。1971年から8年間におよぶ河川改修工事により、1979年、2つの川(南流、北流と記す)は、放水路として1本の新しい河川となり、南・北流は廃川になった。河口まで延長7km、河川敷幅 370m(堤防法線幅 330m)の放水路の完成によって水害の心配はほとんどなくなった。すでに、本ニュースレター(第4号)で野洲川は、流域に暮らす人びとにとって生活用水や灌漑用水を与えてくれた豊かな川だったが、水害をもたらす「暴れ川」であり、下流域に暮らす人々を苦しめてきたことを触れた。ここでは、新しい河川である放水路について紹介したい。

野洲川の川幅は、中流部で約 500mあるのに対して、南流と北流はかなり狭く、双方をあわせても 150m~250m しかなかった。さらに、南・北流は、川床が周辺の集落の地盤より約 2m 高い天井川となっていた。よって、大雨が降ると、この流域は堤防が決壊して水害が繰り返されてきた。

1953年9月25日の台風13号によって、北流の右岸堤防が180m決壊し、周辺の集落は一瞬にして水没した。水防作業をしていた3名が亡くなった。被害は流出または半壊した家屋が約700戸におよび、田畑は約500haが流出または埋没し、300haが冠水した。この大災害を契機に、流域住民による野洲川改修にむけた取り組みが始まった。1958年、建設省は、住民の野洲川改修工事の請願を受け入れ、河道計画の検討を行った。以下の3つの改修案が比較検討された結果、中流案が選択された。

1つ目は、北流の川幅を広げ、曲がった場所を直線に改修する北流案である。周辺には居住者が多いため移転の問題があった。川床が高いので、大量の土砂を掘削する必要があり、土層が砂礫であるため

に漏水の危険があった。2つ目は、北流と南流の川幅を広げ、曲がった場所を直線にする現河道案である。北流案と同様の問題があった。3つ目は、北流と南流を廃川にし、双方の川の間に新しい河川をつくる中流案である。移転家屋が少なく、土層は粘土質であるため技術的に適していた。川の延長が最短であり、掘削量が少なくすんだ。だが、「米どころ」と呼ばれる豊かな水田地帯を潰すことになった。

放水路の建設によって、家屋の立ち退きを強いられるだけでなく、農地が取り上げられて生活が奪われるとして、周辺住民がこの計画案に反対した。また、工事によって失う農地の代替地や移転先の補償問題の解決は簡単ではなく、地道な住民への交渉が行われた結果、ようやく改修工事に取りかかることができたのである。従って、放水路の建設のために、住宅42戸が立ち退き、190haの水田が提供された。また、工事中に発見された弥生時代の服部遺跡は調査が行われた後、放水路の川床に埋没した。

聞き取り調査をしている守山市洲本町開発(かいほつ)は、廃川となった南流の堤防周辺の集落である。現在、南流の河川跡の約42haの土地は「びわこ地球市民の森」として整備が進められており、森を再生するために植樹活動が行われている。また、河川敷を利用したスポーツや放水路におけるいかだ下りなどのイベントが開催されている。このような人びとの野洲川への新たな関わり方をおして、同河川に対する新しいイメージが形成されている。

だが、先祖から受け継がれてきた家屋と土地を手放さなければならなかった人たちの苦渋の選択および、長い期間を要した河川改修の請願から放水路の完成に至るまでの人びとの努力と貢献を忘れてはならないと思う。



旧北流左岸堤防跡の雛鶴(ひなづる)稲荷神社。250年前、野洲川堤防の守護祈願のために、川が U 字型に大きく向きを変える所に建立された。

## 催しのご案内

### ■第13回 定例研究会

1. 日時：平成21年6月26日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者：河原林洋（亀岡FS研究員）
4. 発表内容

「保津川筏研究 モノのつながり、ヒトのつながり」

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

### ■琵琶湖在来魚のナレズシ漬け込み体験 <守山FS>

1. 日時：平成21年6月20日（土）、27日（土）、7月4日（土）  
8:30～13:00（3日間とも、体験内容は同じです）
2. 集合：車でお越しの方は守山漁港に8:30、電車でお越しの方はJR守山駅改札口に8:00までにお集まりください。
3. 内容：守山漁港の朝市で魚を仕入れた後、漬け込みの第一段階である魚の「塩きり」（塩漬け）を行います。
4. 参加費：500円（材料費実費）  
\*参加希望者は、守山FS研究員の嶋田（nshimada@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

## 里山の保全 —誰のために何を守るのか？—

### 生存基盤科学研究ユニット 鈴木玲治

里山<sup>[1]</sup>の生態系の重要性が世間の耳目を集めるようになったのは、1980年代の後半頃からであろう。1989年、日本で初めてのレッドデータブック<sup>[2]</sup>が出版され、里山に生育する植物にも絶滅が危惧される種が多いことが明らかとなり、人の手が頻繁に入ることによって維持されてきた里山のような二次的自然が、様々な生物の重要な生育環境になっていることが認識され始めたのである。2003年にはメダカが環境省のレッドデータブックによって絶滅危惧種に指定されるなど、かつてはどこにでもみられた人里の生物が急速に減少していることに大きな関心が寄せられ、近年は、里山保全のための様々な活動が各地で営まれている。

里山は、薪炭の生産、落葉・下草の採取による堆肥の生産、山菜の採取など、農山村における人々の日々の営みが生み出してきた半自然的環境であり、原生的自然には生息できない様々な生物種の生存を支える重要な環境でもある。しかしながら、これらの生物種のほとんどは、人間が意図的に保全してきたものではなく、人為的な攪乱に適応した結果定着したものであり、伝統的生業の副産物であるともいえる。したがって、伝統的生業が廃れつつある現在、生業とは無関係な人手を加えてその副産物のみを保全しようと試みることは、本末転倒であるように思う。一旦絶滅した生物種が二度と蘇らないのと同様、伝統的生業も一度その伝承が途絶えてしまえば、先人の知恵と経験はいずれは失われてしまう。里山で“絶滅”の危機に瀕しているのは、生物種だけではない。

里山における人と自然との関わり方は、地域によって様々である。例えば、朽木には水田用の厩肥<sup>[3]</sup>

の原料を採取するためのホトラヤマがあり、かつては山地と農地の間に有機的な繋がりが認められたが、化学肥料の導入に伴ってホトラヤマは失われていった。現在、朽木FSではホトラヤマの復元を試みているが、このような取り組みがなければ、地域に固有の営みは、いずれは人々の記憶からも消え去ってしまうだろう。生態系と調和した伝統的な生業をかつてと同規模で復活させることは難しいといわざるを得ないが、各々の地域における人と里山との関わり方の歴史を丁寧に掘り起こし、在地の知恵や経験に学ぶことは、地域の自然条件と社会条件に適した生業を再構築する上で極めて重要である。戦後の燃料革命や農山村の過疎化など、人々の生活様式の変化に伴って里山は放棄されてきたが、食物自給率が40%に満たない資源小国の日本が持続的な生存基盤を確立していくには、里山や休耕田を再び生物資源の生産の場として見直していく必要があるだろう。

誰のために里山の何を守るのか、里山に関わる人それぞれに違った思いがある。そして、生物多様性の保全、景観の保全、伝統文化の伝承、自然体験など、様々な役割を里山に求めがちな外部者と、現実の里山に生きる人々との間にある意識の乖離も決して小さくはないだろう。当プロジェクトの活動によって、里山に関わる様々な立場の人と人とを繋ぎ、各々の思いをぶつけ合い、新たな思いを紡ぎ出す場を創出することで、21世紀に求められる新たな里山像を描くための第一歩を踏み出していきたいと思う。

#### 脚注

- [1] 里山には様々な定義があるが、ここでは里山を「人里近くにある二次林や二次草地」とする。
- [2] 絶滅のおそれのある野生生物種についてのデータをまとめた情報集。日本で最初のレッドデータブックは、1989年11月に財団法人日本自然保護協会・財団法人世界自然保護基金日本委員会が発行した「わが国における保護上重要な植物種の現状」である。
- [3] 家畜小屋の糞尿と敷藁とのまじったものを腐敗させた肥料。